

「試みを受けられた」

「イエスは四十日間荒野にいて、サタンの試みを受け、また、野獣と共におられた。そして、天使たちがイエスに仕えていた。」(マルコによる福音書 1:13、聖書協会共同訳)

「イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。」(マルコによる福音書 1:13、新共同訳)

「イエスは四十日のあいだ荒野にいて、サタンの試みにあわれた。そして獣もそこにいたが、御使たちはイエスに仕えていた。」(マルコによる福音書 1:13、口語訳)

三つの訳を比較すると、いずれも登場する要素は同じです。ところが、文章の区切りが違います。口語訳と新共同訳のイメージは、荒野でサタンと向き合うイエスの姿がまず出てきます。そして、その後、野獣と共におられるイエスの姿が描かれ、そこには天使たちもいるといえます。

一方、聖書協会共同訳では、サタンと向き合うイエスの傍らにはすでに野獣がいます。同時に双方と向き合っているようにも見えます。しかし、イエスは一人ではなく、天使たちがイエスと共にいるから、安心して過ごすことができると言わなければなりません。これは、イエスの置かれた状況がどのようであったとしても、「主はその使いたちに命じて／あなたのすべての道を守られる」(詩編 91:11、聖書協会共同訳)との約束が実現していることを強調するためと思われる。

訳語の違いもイメージを変えます。「試み」(口語訳、聖書協会共同訳)なのか、「誘惑」(新共同訳)なのかの違いです。どちらもギリシャ語「ペラスモス」(「試練」とも訳せる)の訳として正しい。

「誘惑」といえば、何か利益になることを示して誘い、悪いことをさせたり、人の弱さや欲望につけ込み、悪い道にそらせ、被害を与えることがイメージされます。もっとも、「人の心をまどわし、その人にとって本来ためにならない状態へとさそいこむこと。また、そのさそい」(明鏡国語辞典)なので、ここでは、サタンの狙いは「悪い」＝「本来ためにならない状態」＝「神から離れる」ことです。「私は彼らの神となり、彼らは私の民となる」(エレミヤ書 31:33、聖書協会共同訳)との神の約束は違えられることはありません。だから、サタンは人間の側から離れるように仕向けようとするのです。

一方、「試み」は「試しにやってみること。また、その事柄」(明鏡国語辞典)という意味しか持ちません。マタイやルカは具体的な提案を記していますが、マルコは一切、その内容には触れません。人間の弱さにつけ込もうとしたのか、あるいはイエスの自尊心をくすぐろうとしたのか、私たちが想像するありとあらゆる方法でイエスは神から離れるようにとの試みを受けられました。

ただし、これを「試練」と訳してしまうと、「心の強さや実力の程度が厳しくためされるような苦しみ。あることを成し遂げる過程や人生のある局面で遭遇する苦難」(明鏡国語辞典)の意味となり、「初めから神がイエスを鍛えるために仕組んだ」と読めてしまうかもしれません。ヘブライ人への手紙が、「事実、ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることができになるのです」(ヘブライ人への手紙 2:18、聖書協会共同訳)と言う時、イエスの受けられた試みは、弟子たちが受ける試みと相似形であることがイメージされています。

イエスが自らも試みを受けられたからこそ、私たちの痛みに寄り添うことができる方であることは間違いありません。しかし、私たちが目指すのは「練達」ではなく「品格」です。私たちは自らを鍛えて試みに立ち向かい、乗り越えていくのではなく、ただ心を神にまっすぐに向けて、その試みをひらりと躲すのです。

何が私たちにとっての試みとなるかはわかりません。だからこそ、私たちは常に神を見上げていなければならないのです。

もちろん、イエスが試みを受けられたのは、荒野だけではなくありません。人として生きる中で、何度も、何度も試みを受け続けられました。そしてその度ごとに、神に祈り、神と共にその試みを躲し続けてその道を全うされたのです。そのようなイエスのまとわれる品格を頼りに、私たちは今日もその背中を追い続けるのです。

